

# ヴァージニア・ウルフの作中人物に見る神経症的要因

## — 『ダロウェイ夫人』と『波』の二作品をめぐって—

濱西 和子

### はじめに

文学作品に登場する人物たちは、様々な人格、性質、多様な思考を内在するものとして、作家によって創造され表現されてきた。ある者は作家の等身大として、またある者は作家の考えや体験とは全く異質な要素や個性を兼ね備えた人物、つまり作家の一つの想像の糧として従来から作品の中に登場してきたのである。

ウルフの作品、特に『*The Waves*』(波)と『*Mrs. Dalloway*』(ダロウェイ夫人)の作品の中に、読者はある種の異様さ感ぜずにはいられない。それは常人には書くことが出来ない表現や固有のイメージの連鎖や飛翔が繰り返され、読者に奇妙な感を抱かせ、かつ戸惑わせるが、また独特な叙情性に満ちた表現に魅了されることも確かである。一体、ウルフの内的世界の中にはどのようなものが去来していて、ウルフは自分の代弁者として登場人物たちに何を語らせようとしたのであろうか。

またウルフの自伝や彼女の生い立ちの記録からウルフの病歴を知るにつれ、その異質さの根拠を理解しながら作品を読み続けると、そこには、一定の共通した精神分析的なイメージや観念があることに遭遇する。

ウルフが述べているように「狂人から見た常人の世界」、「見えるものと見えざるもの」<sup>註1</sup>という表現で象徴されるように、まさに作家ウルフが自ら体験したところの病の底に眠る、深い闇の世界を我々に赤裸々に提示し、彼女の膨大な知識と教養とで一編の小説という芸術作品を完成させた。人間のこのころの動きに対する深い洞察や狂人の目から見た「真実」、また自己の化身として託した登場人物たちに社会の欺瞞や虚偽を語らせ非難したのではないかと理解される。

精神科医でまたウルフ研究者でもあった、神谷美恵子氏の「ヴァージニア・ウルフ研究」<sup>註2</sup>は精神科医としての氏の科学的な病状診断や文学的解釈の真摯さにおいて大変優れた名著であり、すでにこの著にウルフの病歴と作品の解釈が語り尽くされている感があるが、神谷氏の精神科医としての専門的な視点としてではなく、あくまでも文学的な観点で神経症を表記するようなシーニュを探求し、その解釈を試みたい。

### 1. ウルフの生い立ちと病歴

ウルフは生涯に渡って間歇的に襲ってくる精神病を患っていたことは彼女の伝記や生い立ちの記録からあきらかである。<sup>註3</sup> 家系的な遺伝がみられ、義理の姉や従兄の一人に極端な陽気さから一転して

絶望の底に落ちる躁うつ病的な病相がみられ最後には精神分裂症で精神病院で亡くなった人もいる。これはウルフにも共通した傾向があり、家系的遺伝気質としてウルフは受け継いだと推察される。母を失った十三の時に発病したと言われているが、また同居していた異父兄から性的ないたづらを20歳の頃まで受けていたことが、ウルフの生涯にわたる一つのトラウマとして残り、性に関する複雑で歪んだ考えをもたらしたことは周知の事実である。

生涯この病の発病に苦しみながらも、病状の周期的な起伏のあいまに、猛烈なエネルギーと創造力とで作品を完成させた。かつ躁うつ病に見られる執拗な粘着型性格から、作品に対しての執拗なまでの推敲を重ねた様子は、ウルフが非定型躁うつ病と診断された彼女の病状の振幅と作品の創作過程は平行して連動しているように思える。

そして、ついにウルフは59歳の時に度々の抑うつ状態の後にウーズ川に投身自殺をとげるものである。

## 2. 『Mrs. Dalloway』(ダロウェイ夫人)、をめぐって繰り返される言葉や句、例えば、水、水溜り、波、木、自殺、ナイフ、虚ろ、虎が襲う、戦友エヴァンズへの固定観念、死、孤独、むちを振り上げるなど、文中に見るこのような言葉はウルフの作品の登場人物の精神状態を象徴するシーニュとして認識される。

この小説はたいした筋というものがなく、国会議員の妻であるダロウェイ夫人の一日と平行して、関わることもない狂人セプティマス的一天が語られていく。二人の登場人物はめぐり合うことがないのだが、境遇も社会階級も異なる二人が表と裏のように書かれていて、パーティの夜、ダロウェイ夫人は精神科医のサー・ウィリアム・ブラッドショーから、ある青年が自殺したことを聞かされ、ここではじめて、この二人の人物の接点ができる。この表と裏とも思える二人の人物ダロウェイ夫人とセプティマスは、両者とも死についての形而上的な問題について煩悶し、狂人セプティマスが精神病院に入院させられることを嫌って窓から自殺した話を聞いて、ダロウェイ夫人は逆にこの青年が自分の身代わりと思える死から、生に対するヴィジョンを捉えたと理解するのである。戦争が終わりダロウェイ夫人がロンドンの街を歩きながら、ビック・ベンの鐘の音が時の経過を象徴的に告げているかのように鳴り響く。

セプティマスは戦争で上官の爆撃死によって精神に異常をきたしたとあるが、明らかな精神的な症状をすでにあらわして、戦場でのエヴァンズの死は単なる一つの契機であったと言える。下線の *unable to pass* 一歩前に進めない、水溜りを越せないという句の中にウルフの幼き頃の記憶「生きているって何て奇妙なことだろう。私とは何かなどと形而上学的なことを考えこむあまり、水たまりをとびこえられなかったことがあった。」のを憶えているとある。<sup>註4</sup>

何らかの想念に捉われて身体が膠着して金縛り状態になることは、この病状の人にはよく見られる。また他者に対して *stranger* だと思わせ、不安を抱かせる様相はすでにセプティマスの目つきや容姿などの外的条件に表れている。また世界は自分にむちをふりあげるといのは、自分を攻撃してくる世間にたいしての恐怖、被害妄想がうかがえる。

Septimus Warren Smith, who found himself unable to pass, heard him.

Septimus Warren Smith, aged about thirty, palefaced, beak-nosed, wearing brown shoes and a shabby overcoat, with hazel eyes which had that look of apprehension in them which makes complete strangers apprehensive too. The world has raised its whip; where will it descend?

( *Mrs. Dalloway* p.15 )

( 先へ進めなくなってしまったセプティマス・ウォレン・スミスは、ウォトキスの言葉を聞いた。三十歳ほどのセプティマス、蒼白く、かぎ鼻で、茶色の靴をはき、みすばらしい外套を着て、そのはしばみ色の目は、初対面の人皆を不安がらせるような表情をたたえていた。彼には思えた、世界中がむちをふりあげている。むちはどこにあたるのか。)

( *ダロウェイ夫人* p.18 )

女王が乗っていると思われる車がパンクしたとき、車のブラインドが木のようなパターンという、ある一定のパターンにこだわる傾向があり、特にウルフの場合は木に対する執着が強い。

また自分の目の前で視覚障害からくる、中心に全てのものが、**centralization** 化する感覚とか、怒り、恐怖感、また揺れ動く焔など下線部の単語はウルフの作品のなかに頻繁に使われる言葉である。これは不安定なこころの内面を象徴するような言葉と言えるのではないか。

Every one looked at the motor car. Septimus looked. Boys on bicycles sprang off. Traffic accumulated. And there the motor car stood, with drawn blinds, and upon them a curious pattern like a tree, Septimus thought, and this gradual drawing together of everything to one centre before his eyes, as if some horror had come almost to the surface and was about to burst into flames, terrified him. The world wavered and quivered and threatened to burst into flames. It is I who am blocking the way, he thought. Was he not being looked at and pointed at; was he not weighted there, rooted to the pavement, for a purpose? But for what purpose?

( *ibid.*, p.16 )

( 誰もが自動車を眺めた。セプティマスも見た。自転車に乗った少年たちは、飛びおりた。車をとまった。あそこに自動車がとまっている。ブラインドをおろして、そして、ブラインドには木のような奇妙な柄がある、とセプティマスは思った。まるで、なにか恐ろしいものが表面近くまで出てきて、今まさに焔となって爆発しようとしているかのように、彼の眼前で、こうしてすべてのものが一つの中心へと、おもむろに集結するので、彼は恐怖でみたされた。世界が揺れ、おののき、今にも爆発して焔になりそうだった。道をふさいでいるのはおれだ、と彼は考えた。だから、人に見つめられ、指さされていたのではなかったか。おれは何かの目的のために、そこでおもしをつけられて、舗道に釘づけにされるのではなかったか。だが、何の目的のために?)

( *ibid.*, p.19 )

もう結婚して久しい夫婦なのに、妻が自分の思考の中に入り込んで邪魔するとかえ、またキーワードのように自殺すると人目をはばからず繰り返す夫。妻の呼びかけにも飛び上がり反応し、また他人が異様な夫に気がつかないか、自殺という言葉が聞かれなかったかと不安がる妻。

夫セプティマスにとっては、例え妻であろうと、遮断された自分の世界で生きているのだから、他

者の言葉にはまったく関与しないのである。セプティマスの中にすでに典型的な離人化という病相がみられる。

‘Come on,’ said Lucrezia.

But her husband, for they had be married four, five years, now, jumped, started, and said ‘All right!’ angrily, as if she had interrupted him.

People must notice; people must see. People, she thought, looking at the crowd staring at the moter car, the English people, with their children and their horses and their clothes, which she admired in a way; but they were ‘people’ now, because Septimus had said, ‘I will kill myself’; an awful thing to say. Suppose they had heard him? She looked at the crowd.

(ibid., pp.16-17)

(「さあ」とルクレイツィアは言った。しかし彼女の夫は一ふたりは結婚して、四、五年にもなるのだ一飛びあがり、ぎくっとし、怒ったように「オーライ」と言った。まるで彼女に邪魔されたかのように。

人が気づくわ、きっとわかってしまうわ、人に、と彼女は自動車を見ている群衆を眺めながら考えた。それは子供たちや馬を連れたイギリス人たちで、彼女にも一応感心できる服装をしている。だが、この人たちは、今彼女たちふたりに非難の眼を向ける「人々」なのだ。セプティマスが「おれ、自殺するよ」と怖ろしいことを言ったのだったから。この彼の言葉を、この人たちが聞いたとしたらどうだろう、と彼女は群衆を眺めた。)

(ibid., pp.19-20)

ホームズ医師の診断によるとただ体調が弱っただけだから、他のことに興味をもたせと妻に忠告するが一方、妻は夫の異常さに不安を抱きつつも、ホームズ医師の診断に対する疑念を抱く。

Lucrezia Warren Smith, sitting by her husband’s side on a seat in Regent’s Park in the Broad Walk, looked up. ‘Look, look, Septimus!’ she cried. For Dr. Holmes had told her to make her husband ( who had nothing whatever seriously the matter with him but was a little out of sorts) take an interest in things outside himself.

(ibid., p.23)

(リージェント公園の大歩道、ブロード・ウォークのベンチに、夫と隣り会って腰掛けていたルクレイツィア・ウォレン・スミスは、空を見上げた。「ごらんなさいよ、セプティマス、そら、見てよ」

と彼女は叫んだ。なぜなら、ホームズ先生からこう言われていたからだ、彼女の夫が（別に大したことではなくて、ただ少々体調をこわしているだけなのですよ）、自分以外のものに興味を持つようにしむけなさいと。)

(ibid., p.27)

夫セプティマスは、もはや妻のちょっとした変化にも無関心である。妻はもう耐えられないと嘆くがそれでもまだ夫を愛しているが、日常的な周りの人々とはあまりにもかけ離れた夫の茫然とした視線、ふさぎ込んだ姿に尋常でないものを感じながらもホームズ医師の病気ではないという言葉信じ

ようとしているが、それでも不安はつづける。

‘Septimus!’ said Rezia. He started violently. People must notice.

‘I am going to walk to the fountain and back,’ she said. For she could stand it no longer. Dr. Holmes might say there was nothing the matter. Far rather would she that he were dead! She could not sit beside him when he stared so and did not see her and made everything terrible; sky and tree, children playing, dragging carts, blowing whistles, falling down; all were terrible. And he would not kill himself; and she could tell no one.....

‘Septimus now, and looking back, she saw him sitting in his shabby overcoat alone, on the seat, hunched up, staring. And it was cowardly for a man to say he would kill himself, but Septimus had fought; he was brave; he was not. Septimus now. She put on her lace collar. She put on her new hat and he never noticed; and he was happy without her. Nothing could make her happy without him! Nothing! He was selfish. So men are. For he was not ill. Dr. Holmes said there was nothing the matter with him.

(ibid., pp.24-25)

「セプティマス！」とレイツィアは言った。すると彼は、ひどくぎっくりした。これでは人が気づくにちがいないわ。「噴水まで行って帰ってきますよ」レイツィアは言った。

彼女は、これ以上我慢できなかったのだ。ホームズ先生は、大したことはないとおっしゃるかもしれない。でも、セプティマスなんか、死んでしまった方が、ずっとずっとましだわ。あの人が目をあんなにすえていて、わたしを見てるんじゃないわ、すべてを恐ろしいものにしてしまうとき、わたしはとて、そばに坐ってなどいられない。空と木、車を引っ張り、笛を吹き、ころんだりして遊んでいる子供たち、みんな恐ろしい。そして、あの人は、よもや自殺なんかしまいと思うけれど。それなのに、誰にも話せないのです。わたし自身のお母さんにだって。

「セプティマス！」は働き過ぎたのです」と言うのがせいぜい。愛することは人を孤独にすると彼女は思った。誰にも言えないのだ。今は、セプティマスにさえも、言えない。彼女は振り返って、彼がくたびれた外套を着て、ペンチにひとりで腰掛けて、体をまるめ、何かを見つめて坐っているのを見た。男が自殺するなど言うのは、卑怯だ。だが、セプティマスは出征したのだ。勇敢だった。今は、そのセプティマスではない。わたしがレースの襟をつけて、新しい帽子をかぶる、でもあの人は、それに気づかない。そしてあの人は、わたしがいなくても幸福なのだ。あの人なしでは、何事もわたしを幸福にすることはできないのに。そうよ、何事も。

あの人は自己中心だ。男の人ってそうなのだ。なぜって、病気ではないのだもの。ホームズ先生は、なにも悪いところはないとおっしゃった。）

(ibid., p.29)

ウルフの木に対する観念には彼女特有の宇宙観がある。この地球上に存在する生命のあるもの、木のように確と大地に根をはるものは、自己の不安定な存在を支える重要なファクターである。宇宙の万物のうごきである海や波もウルフの原初風景であり、ウルフの作品では叙情的な表現として欠かせない重要な要素である。

Men must not cut down trees. There is a God. (He noted such revelations on the backs of envelopes.)

Change the world. No one kills from hatred make it known (he wrote it down).

(ibid., p.26)

(人間どもは、木を伐ってはいけない。ある種の神が存在している。(彼は、封筒の裏にそういう啓示を書きとめた。) 世界を変えてしまえ、誰も憎悪から人を殺すのではない。それを知らしめよ。(彼は書きとめた。)

(ibid., p.31)

ここで戦友エヴァンズ、死人、垣根のむこうにエヴァンズがいるという幻覚や妄想が固定観念として繰り返し出現してくる。

There was his hand; there the dead. White things were assembling behind the railings oppsite. But he dared not look. Evans was behind the railings! 'What are you saying?' said Rezia suddenly, sitting down by him.

(ibid., p. 27)

(ここにおれの手がある。死人がいる。真向うの垣根のうしろには、白いものが集まっている。だが、おれには見る勇気はない。エヴァンズが、垣根の向こうにいるのだもの。「何を言っているの」とレイツィアが彼のそばに腰かけて、とつぜん言った。)

(ibid., p.31)

自分は神の命で、この世を変えるために、生から死の世界に下された生贄の小羊だと、全く意味不明な精神分裂的な妄想を抱き、自己を英雄化し、命の果てることのない苦悶者、孤独ものと自己をアイデンティティー化する。

'Look,' she implored him, pointing at a little troop of boys carrying cricket Stumps, and one shuffled, spun round on his heel and shuffled as if he were acting a clown at the music hall. 'Look,' she implored him, for Dr. Holmes had told her to make him notice real things, go to a music hall, play cricket—that was the very game, Dr. Holmes said, a nice out-of-door game, the very game for her husband. 'look ' she repeated.

Look the unseen bade him, the voice which now communicated with him who was the greatest of mankind, Septimus, lately taken from life to death, the Lord who had come to renew society, who lay like a coverlet, a snow blanket smitten only by the sun, for ever unwasted, suffering for ever, the scapegoat, the eternal sufferer, but he did not want it, he moaned, putting from him with a wave of his hand that eternal suffering, that eternal loneliness.

'Look,' she repeated, for he must not talk aloud to himself out of doors.

(ibid., 27-28)

(「ごらんなさいな」と彼女は夫に懇願した。クリケットのウィケットを運んでいる少年の小さな一団を指して嘆願した。ひとりの少年が足を引きずって歩き、まるで、寄席で道化を演じているかのよう、かかとでくるっと回り、また足を引きずった。

「ごらんなさいよ」と彼女は嘆願した。なぜなら、ホームズ先生が、現実にもそこにあるものを彼がみてとるようにしむけるとよい、寄席にいたり、クリケットをやるように、とおっしゃったのだ。

「見てごらんなさいよ」と彼女はくり返した。見よ、と見えざるものが彼に命じた。その声は、今、

通信する。彼は、人間の中で最も偉大な人間で、最近、生命の世界から引き抜かれて、死者の仲間に入れられた者であり、社会を更新するために世につかわされた主である。掛けぶとんのように、また太陽のみが滅ぼし得る雪の毛布のように横たわり、永久にそこなわれず、永久に苦しむいけにえの小羊、永久の苦悩者だ。だが、彼は苦しみを願ってはいない。彼は手を振って、あの永遠の苦悩、永遠の寂寞をおしやうめいた。「ごらんなさいな」と彼女はくり返した。夫は、戸外でひとりごとを言っているのではないのだ。)

(ibid., p.32)

セプティマスの中に彼の人格とは全く異なる他人が住んでいて、残虐で邪悪なことを言い、死人に話しかけ、もはや以前のセプティマスではないと人格の変容と異常さを妻は認める。

But Lucrezia Warren Smith was saying to herself, It's wicked; why should I suffer? She was asking, as she walked down the broad path. No; I can't stand it any longer, she was saying, having left Septimus, who wasn't Septimus any longer, to say hard, cruel, wicked things, to talk to himself, to talk to a dead man, on the seat over there; when the child ran full tilt into her, fell flat, and burst out crying.

(ibid., p.71)

(しかしルクレツィア・ウォレン・スミスはひとりごとを言っていた。ひどい、なぜわたしが苦しまなくてはならないの、と彼女は広い道を歩きながら自問していた。いいえ、我慢できないと彼女はセプティマスをあとして言っていた。そのセプティマスは、もうセプティマスではなかったのだ。お隣のベンチで、ひどい、残酷な、邪悪なことを言い、ひとりごとを言い、死人に話しかけるのだもの。そのとき、子供がまっしぐらに彼女に向って突進してきて、ばたんと倒れ、泣き出した。

(ibid., p.84)

戦争で身内の死、友人の死は誰にでも起こり得る現実であり、常人はそれを受け止めていくが、セプティマスはそれができず、常にエヴァンズの幻影に執拗に捉われている。セプティマスの発病は必ずしもエヴァンズの戦争での爆撃死が契機となったわけではなく、すでに気質として以前から所有していたものと思われる。

She frowned; she stamped her foot. She must go back again to Septimus since it was almost time for them to be going to Sir. William Bradshaw. She must go back and tell him, go back to him sitting there on the green chair under the tree, talking to himself, or to that dead man Evans, whom she had only seen once for a moment in the shop. He had seemed a nice quiet man; a great friend of Septimus's, and he had been killed in the War. But such things happen to everyone. Everyone has friends who were killed in the war.

(ibid., p.72)

(彼女は眉をしかめた、片足をどんとついた。かれこれサー・ウィリアム・ブラッドショー氏のところに行く時間が来ていたから、セプティマスのところにまた戻ってゆかなければならなかった。戻って行って言わなくちゃ、木の下緑の椅子に腰かけて、ひとりごとをいつているか、でなくちゃ、わたしが一度、ほんのちょっとの間お店で見かけただけの、死んだエヴァンズに話しかけているあの人のところに戻らなくちゃ。エヴァンズさんは静かでない人のように見えた。セプティマスの親友で、

大戦で餓死したのだ。だが、そういうことは誰にでも起ることだ。

(ibid., p.85)

セプティマスはますます精神に異常をきたしてきた。ドアの後に人の顔が見えるという妄想。

ウルフ特有のランプが浮かんでいるようだという叙情的で詩的な表現。水の中で浮いて揺れ動くもの、川辺に立ち呆然と虚ろな表情で自殺を考えること。これらの病は明らかな精神分裂のシーニュである。

帰宅した後の尋常ではない消耗感。興奮と高揚のあとの奈落の底に落ちていくような絶望感。

次から、次と妄想と幻覚と孤独感が彼に襲いかかってくる。人格分裂を疑う余地はもうない。

But Septimus let himself think about horrible things, as she could too, if she tried. He had grown stranger and stranger. He said people were talking behind the bedroom walls. Mrs. Filmer thought it odd. He saw things too- he had seen an old woman's head in the middle of a farm. Yet he could be happy when he chose. They went to Hampton Court on top of a bus, and they were perfectly happy. All the little red and yellow flowers were out the grass, like floating lamps he said, and talked and chattered and laughed, making up stories. Suddenly he said, 'Now we will kill ourselves, when they were standing by the river, and he looked at it with a look which she had seen in his eyes when a train went by, or an omnibus - a look as if something fascinated him; and she felt he was going from her and she caught him by the arm. But going home he was perfectly quiet-perfectly reasonable. He would argue with her about killing themselves; and explain how wicked people were, how he could see them making up lies as they passed in the street. He knew all their thoughts, he said; he knew everything. He knew the meaning of the world, he said.

Then When they got back he could hardly walk. He lay on the sofa and made her hold his hand to prevent him from falling down, down, he cried, into the flames! And saw faces laughing at him, calling him horrible disgusting names, from the walls, and hands pointing round the screen. Yet they were quite alone. But he began to talk aloud, answering people, arguing laughing, crying, getting very excited and making her write things down. Perfect nonsense it was; about death; about Miss Isabel Pole. She could stand it no longer. She would go back.

(ibid.,72-73)

(しかしセプティマスは平気で恐ろしいことを考えている。わたしだって考えようとすれば考えられることだけれど、あの人はますますおかしくなってきた。寝室のドアのうしろで人が話していると言った。フィルマーの奥さんはそれはおかしいとおっしゃった。あの人はまた、いろいろなものを見る—しだの真中におばあさん顔が見えたこともある。でもその気になれば、幸せにもなれるのだ。バスの二階に坐ってハンプトン離宮にいったときは、ふたりは完全に幸福だった。草地では小さな赤と黄色の花が全部開いていた。それをランプが浮かんでいるようだと言った。そして物語を作って、話したりぺちやぺちやしやべったり笑ったりした。あの人は川のそばに立っていたとき突然、「さあ、自殺しよう」と言った。そして汽車が通り過ぎたり、バスが通ってゆくとき目に浮かべた表情—何にかに魅せられた表情—で川を眺めた。わたしはあの人が行ってしまうと思い、腕をつかまえた。

だが帰り道では完全に平静であった—完全にわけがわかっていた。自殺についてわたしと議論し、人がどんなに邪悪か、また街ですれちがったとき人が嘘をでっち上げているのがわかったと説明するのだった。おれには、この人たちが考えていることがわかると言った。あの人は何でも知っていた。この世界の意味を知っていると言った。

「それから、家に着くとあの人は歩くこともやっとだった。ソファに横たわり、炎の中にどんどんおちてゆく—と、そう叫んだのだけれど—のをくいとめようとわたしに手を持たせ、壁からいろいろな顔が出てきて、自分を嘲笑し、恐ろしいひどい悪態をつくとか、ついたての辺りでいくつもの手がこちらを指さしているのが見えるとか言った。でも、部屋には全くふたりだけだったのだ。しかしあの人は大声で話しはじめ、人々の質問に答え、議論し、笑い、泣き、たいそう興奮して、わたしにいろいろなことを書かせた。死について、イザベル・ポール先生について、まったく意味のないことだった。わたしはもう我慢できない。あの人のところにもどろう。」

(ibid., pp.85-86)

精神病の人は概ね鏡の中の自分を見つめたり、他人を正視できない。道を歩いて来た通行人をエヴァンズと間違えてしまう。砂漠でひとりという離人感、世界の運命を何世紀にも担ってきたという誇大妄想と自己の英雄視は特徴的な現象である。

'For God's sake don't come!' Septimus cried out. For he could not look upon the dead. But the branches parted. A man in grey was actually walking towards them. It was Evans! But no mud was on him, no wounds; he was not changed. I must tell the whole world, Septimus cried, raising his hand ( as the dead man in the grey suit came nearer ), raising his hand like some colossal figure who has lamented the fate of man for ages in the desert alone with his hands pressed to his forehead.

(ibid., pp.76-77)

(「後生だから、来ないでくれ」とセプティマスは叫んだ。彼は死者を正視することができなかった。しかし枝々はわかれた。灰色の服を着た男が実際彼らの方に歩いてきた。エヴァンズだ！だが体に泥もつかず、傷もなく、変っていなかった。全世界に話さなくちゃとセプティマスは手をあげて叫んだ。(灰色の背広を着た死者は近づいていたのだ。)砂漠でたったひとりで両手をひたいにおしあて、頬には絶望の皺をよせ、何百年も人間の運命を嘆いてきた巨大な人のように、手をあげて叫んだのだ。)

(ibid.,p.90)

頭脳は完璧で実際的なことは出来るのに、味覚もなく何も感じない、何の感動もない。これは人間としての感覚を喪失した生きる屍だ。非人格化であり、精神分析的には典型的な離人症という病相である。

But he could not taste, he could not feel. In the tea-shop among the tables and the chattering waiters the appalling for came over him—he could not feel. He could reason; he could read, Dante for example, quite easily.....he could add up his bill; his brain was perfect; it must be the fault of the world then- that he could not feel.

(ibid.,96)

(感じがなかった。喫茶店で、テーブルや、しゃべっている給仕人の間で、圧倒的な恐怖が彼を襲った一彼には感じがない。理屈を言うことはでき、読書もできた。...彼は勘定書の足し算ができたし、頭は完全だった。世の中の落度にちがいがなかった一彼が感じられないということは。)

(ibid., p.112)

精神病の遺伝のために子供をも持つことを諦めた、ウルフ自身の人生にも関わることである。家族という最小のユニットを構築できず、子孫という将来への連続的な関係も築けない。

One cannot bring children into a world like this. One cannot perpetuate suffering, or increase the breed of these lustful animals, who have no lasting emotions, but only whims and vanities, eddying them now this way, now that.

(ibid., p.98)

(このような世の中に子供たちを運び込むわけにはゆかない。苦勞の永続をはかり、この肉欲の動物、人間の種属をふやすわけにはゆかない。感情は長続きしないし、気まぐれや見栄だけで、今はこちら次にはそちらといった工合に渦巻き流れているしろものなのだから。)

(ibid., p.114)

妻が子供を持たない悲しみにすすり泣くのを聞いても、同情することもなく全く感情導入をしない。むしろ妻のすすり泣きをピストンの音と比較してみるが、それでも自分の住む世界以外のことは彼にとっては無関係だが、そのすすり泣きの声に彼は、ますます奈落の底に落ちていく気がするだけである。

At tea Rezia told him that Mrs.Filmer's daughter was expecting a baby. She could not grow old and have no children! She was very lonely, she was very unhappy! She cried for the first time since they were married. Far away he heard her sobbing; he heard it accurately, he noticed it distinctly; he compared it to a piston thumping. But he felt nothing.

His wife was crying, and he felt nothing; only each time she sobbed in this profound, this silent, this hopeless way, he descended another step into the pit.)

(ibid., p.99)

(お茶のとき、レイツィアはフィルマー夫人の娘に赤ん坊が生まれると話した。わたしだって子供なしで年をとっていくわけにはゆかないわ！とってもさびしいの、とっても不幸なの！彼女は結婚以来初めて泣いた。彼には彼女のすすり泣きが遠くの方で聞こえた。正確に聞こえたし、明確に気づいた。彼はこの音をピストンのとんとんいう音に比べてみた。だが何の感じもしなかった。妻が泣いていたのに、なんにも感じなかった。ただ妻が声もたてずに深い、絶望的な調子ですすり泣くごとに、彼はもう一歩地獄へ下りてゆくのだった。)

(ibid., p.115)

セプティマスの「頭痛、不眠、恐怖、夢」、は神経症の初期の典型的な症状で、この程度においては・ブラッドショーの安静療法は妥当であった。神経症は精神や体調に不調をきたし、それが高じると精神分裂という狂気にまで発展する可能性を秘めている、この予兆はすでにセプティマスの中に見られる。-headaches, sleeplessness, fears, dreams -nerve symptoms and nothing more, he said. If Dr. Holmes found

himself even half a pound below eleven stone six, he asked his wife for another plate of porridge at breakfast.(Rezia would learn to cook porridge.) But, he continued, health is largely a matter in our own control.

(ibid., p.100)

(— 頭痛、不眠、恐怖、夢—をすべて無視して、神経症状だ、それ以上のものではないと言った。もしホームズ医師の目方が百六十ポンドより半ポンド少ないことが判明したら、朝食にオートミールをもう一皿妻に所望するだろう。( レイツィアさんはオートミールの料理法を憶えますよ。)だが健康は主として自分たちでコントロールすることですと彼は続けた。)

(ibid., p.117)

孤立、離人化、協調性の欠如は典型的な病相現象であるが、それでもセプティマスは孤独であることは大なる自由であると自己肯定をしている。世界は幸せに満ち足りているのに、何故に自殺する意味があるのかと、反復回想するが、疲労、消耗感から思考回路は空転するばかりで、支離滅裂であり思考はプラスとマイナスの間を往復する。

So he was deserted. The whole world was clamouring: Kill yourself, kill yourself, for our sakes. But why should he kill himself for their sakes? Food was pleasant; the sun hot; and this killing oneself, how does one set about it, with a table knife, uglily, with floods of blood, -by sucking a gaspipe? He was too weak; he could scarcely raise his hand. Besides, now that he was quite alone, condemned, deserted, as those who are about to die are alone, there was a luxury in it, an isolation full of sublimity; a freedom which the attached can never know.

(ibid., p.101)

(こうして彼は置きざりにされた。全世界が叫んでいた、われわれのために自殺しなさい、自殺しなさいと。だがなぜ彼らのために自殺しなければならないのか。食事は楽しく、太陽は照っていた。しかもこの自殺、どうしてやってのけるのか、テーブル・ナイフでみにくく、血をおびたどしく流して—それともガス管をくわえて?彼はあまりにも力無かった。ほとんど手をあげることもできなかった。その上、彼は非難され、置きざりにされ、死にゆく者がひとりきりでいるように全くひとりぼっちになってみると、この孤独には一種の贅沢さがあった。崇高さにみちた孤立、人にくっついている者が決して知り得ない自由がある。)

(ibid., p. 119)

死者エヴァンズの亡霊につきまとわれる。払っても払ってもセプティマスの妄想の中に対象が回帰切追のように出現してくる。

It was at that moment (Rezia had gone shopping) that the great revelation took place. A voice spoke from behind the screen. Evans was speaking. The dead were with him.

‘Evans, Evans!’ he cried.

(ibid., p.102)

(偉大な啓示があったのはその瞬間だった( レイツィアは買物に出かけていた)。ついたてのうし

ろから声がした。 エヴァンズがしゃべっていた。ここには死者たちが来ている。 「エヴァンズ、エヴァンズとさげんだ！」)

(ibid., p.110)

エヴァンズの幻覚がまた現れる。 ひとりごとをつぶやくが、言葉を使った他者とのコミュニケーションは不可能である。

So there was a man outside; Evans presumably; and the roses, which Rezia said were half dead, had been picked by him in the fields of Greece. Communication, he muttered. 'What are you saying, Septimus?' Rezia asked, wild with terror, for he was talking to himself.

(ibid., p.102)

それでは外に男がいたのだ、おそらくエヴァンズだ。それからレイツィアが半分しおれてると言ったばらはギリシャの野原で、エヴァンズが摘んだものだ。言葉の伝達は健康であり、幸福である。

コミュニケーションは、と彼はつぶやいた。「あなた、何を言ってらっしゃるの？」とレイツィアが恐怖でひどく興奮して訊いた。彼はひとりごとを言ってるのだったから。)

(ibid., p.119)

セプティマスの攻撃性を薬で眠らせ鎮める、ホームズのありきたりな診断に対する不満。医師ホームズを襲いくる獣とたとえ、脅迫観念のように彼の診断を拒否する。

You brute! You brute? Cried Septimus, seeing human nature, that is Dr. Holmes, enter the room. Now what's all this about, said Dr. Holmes in the most amiable way in the world. Talking nonsense to frighten your wife? But he would give him something to make him sleep.

(ibid., p.102)

(「こいつ、獣め！獣め！」とセプティマスは人間性、つまりホームズ先生が部屋に入ってくるのを見て叫んだ。「このさわぎはいったいなんですか？」とホームズ先生は世にも愛想よく言った。「わけのわからないことを言って、奥さんをおどろかせておられるのですかね」しかし彼はセプティマスを眠らす薬をあげようと言った。)

(ibid., p.120)

『ダロウェイ夫人』の作品のホームズ医師と精神科医サー・ウィリアム・ブラッドショーを科学的な人物達と見なすのならば療養所に家族と別れて、隔離するように指示するのは非人間的であり、またブラッドショーの社会的名声、自動車や服装に対する細心の注意などは、彼の権威主義的な表れであり、狂人の目から見れば、このような科学の化身は襲いくる獣（けだもの）という比喻をする。これはウルフ自らの体験にもとづいているものと容易に推測できる。

Indeed it was .....Sir William Bradshaw's motor car, low, powerful, grey with plain initials interlocked on the panel, as if the pomps of heraldry were incongruous, this man being the ghostly helper, the priest of science: .....For often Sir William would travel sixty miles or more down into the country to visit the rich, the afflicted, who could afford the very large fee which Sir. William very properly charged for his advice.

(ibid., p.103)

(ほんとうにそうだ—サー・ウィリアム・ブラッドショーの自動車だ。丈が低く、強力で、車体は灰色、パネルにあっさりした字体が組み合わさっていた。この人は科学の精神的助手、かつ科学の司祭であるから、けばけばしい紋章はそぐわないかのようにであった。…(中略)…なぜならサー・ウィリアム・ブラッドショーは彼が往診料としてしごく当然に請求した高額の金を支払う余裕のある富裕な苦悩する人々を訪れるために、田舎に六十マイルかそれ以上も往診することがよくあったから。)

(ibid., pp.120-121)

### 3. 『波』をめぐって。最もウルフの人物像に近いと言われているロウダにみる、繰り返される言葉と彼女の存在する世界について。

The sun had not yet risen. The sea was indistinguishable from the sky, except that the sea was slightly creased as if a cloth had wrinkles in it. Gradually as the sky whitened a dark line lay on the horizon dividing the sea from the sky and the grey cloth became barred with thick strokes moving, one after another, beneath the surface, following each other, pursuing each other, perpetually.

(ibid., p.5)

(陽はまだ昇らなかった。縮緬皺を寄せたかのようなさざなみ波が海面にひろがるほかは、海と空の区別はつかなかった。海と空を割す一線がしだいに色濃くなると、灰色の海には良く幾筋もの大波が涌き起こり、次から次へ、追いかけて追いかけて、絶えることなくうねりよせた。

(ibid., p.3)

この宇宙の万物を象徴的するかのような、海の描写から始まる『波』は、ウルフの小説の中でも完成度の高い小説と言える。この作品は9章に分離されていて、六人の幼なじみの登場人物(バーナード、ネヴィル、ルイス、スーザン、ジニィ、ロウダ)の独白により、彼らの英雄的存在であるパーシヴァルのインドでの落馬による死が語られている。それぞれの人物の性格から、あたかも最初から定められていたかのような各々の運命を、登場人物のモノログ形式で円環的に描かれており、仲間がパーシヴァルの送別会に再会し、その後しばしの時を経て人生半ばになって再び再会して、それぞれの人生を語りながら展開されていく。

その中でも最もウルフの化身と思われる、ロウダという神秘的で、象徴的な人物について探求することは、ウルフの人物像や彼女の体現した常人の見えざる世界や意識を表現しているのではないかと思われる。ロウダとセプティマスの神経症のレベルが異なるのは明白である。

ロウダに関わるキーワードは、淡い色、白色、はかない生命、たそがれどきの一瞬のはかなさ、揺れ動くもの、羽毛のように飛翔し、この世界から消えゆくもの、水などのような言葉が繰り返される。

**Rhoda's are like those pale flowers to which moths come in the evening.**

(ibid., p.12)

(ロウダの眼は、たそがれに蛾の群がる淡色の花のよう。)

(ibid., p.11)

ロウダは水盤の中の揺れ動く白い花びらを眺めながら夢想していると、突如イメージの飛翔があり、白い船の艦隊が岸におしよせる空想や、小枝が筏に変容して人を助けるような空想がロウダの意識の中に何の脈絡もなく、支離滅裂に浮かび上がってくる。これこそウルフの小説の「意識の流れ」と称される典型的な手法である。

Here is Rhoda on the path rocking petals to and fro in her brown basin. 'All my ships are white,' said Rhoda. 'I do not want red petals of hollyhocks or geranium. I want white petals that float when I tip the basin up. I have a fleet now swimming from shore to shore. I will drop a twig in as a raft for a drowning sailor. I will drop a stone in and see bubbles rise from the depths of the sea.

(ibid., p.14)

(「……………小道でロウダが、茶色の鉢に花びらを浮かせて、揺り動かしているわ。「わたしの船はみんな白いの」、ロウダは言う。「たちあおいやゼラニウムの赤い花びらはいらぬのよ。鉢を傾けると漂っていく白い花びらが欲しいの。岸から岸へ、群をなして、船が走るわ。小枝を入れると、溺れた水夫を助ける筏になるの。小石を入れると、海底から泡が立つの。」

(ibid., pp.13- 14)

数字などの具体的で実質的なものに対する興味のなさ、 皆んなは答えが解るのに自分だけが解らないという劣等感や疎外感を抱きつつ孤立意識は高まる。

'Now Miss Hudson,' said Rhoda, 'has shut the book. Now the terror is beginning. Now taking her lump of chalk she draws figures, six, seven, eight, and then a cross and then a line on the blackboard. What is the answer? The others look; they look with understanding.

(ibid., p. 17)

(「ミス・ハドスンが」ロウダは言う、「本を閉じられた。こわいことがいよいよ始まるわ。ほら、白墨を手にして、黒板に6・7・8・と数字を、それから十字記号を、ついで横線をお書きになるわ。答はどうなりますか。みんなは見ている。分かったみたいよ。

(ibid. p. 16)

ロウダは黒板の数字を眺めてはいないで、自分の白い夢想の世界に入り込んでいるのだ。他者とは異なる肉体を持ち、肩胛骨の羽の揺らぐように、彼女の意識も上へ下へと遊離していて、白い環の中で揺らいでいる。

' There Rhoda sits staring at the blackboard,' said Louis, ' in the schoolroom, while we ramble off, picking here a bit of thyme, pinching here a leaf of southern wood while Bernard tells a story. Her shoulder-blades meet across her back like the wings of a small butterfly.

And as she stares at the chalk figures, her mind lodges in those white circles; it steps through those white loops into emptiness, alone. They have no meaning for her. She has no answer for them. She has no body as the others have.

(ibid., pp.17- 18)

(「ロウダは坐って黒板を見つめている」、ルイスは言う、「教室の中で、ぼくたちはふらふら歩き、バーナードの話聞きながら、たちじゃこう草や、にがよもぎを摘んでいるのに。彼女の肩胛骨は、小さな蝶の羽のように、背

中でくっつき合っているよ。白墨の数字を見つめながら、心は白い環の中に吸いこまれているのだ。白い環をくぐり、無の中に独り入っていく。彼女にとって数字は無意味だ。答えなど持ち合わせていない。ほかの人たちのような肉体を持ってないのだ。」

(ibid., pp..16- 17)

精神も肉体も揺れ動くロウダは、自分の遊離していく知覚、感覚や現実感をベッドの木の縁やタンスや樹木につかまって浮遊する自分を支え、自己を取り戻そうとする。

何か硬いもの、木や土など、自分を支える物体や自己の存在や生命感を確認できるものに触れたり、思い出したりする。この現象は精神分析的に言えば、自己消失や疎外感、知覚能力の減少からくる離人症の一つと言えるのではないか。

また、幼なじみの二人の女性、スーザンとジニイの地についた生命力と情熱はロウダにとっては自分に欠如した特性であり、二人に対して羨望感を抱く。スーザンは水晶の塊のような目をしており、大地にしっかりと根をおろす逞しさを持つ。また、熱い炎のように踊るジニイの情熱に対して、ロウダのいつもそば濡れた、泉の精であり、儚い、揺れ動く水のような彼女は友人二人のようになりたいという願望を抱く。

‘As I fold up my frock and my chemise,’ said Rhoda, ‘so I put off my hopeless desire to be Susan, to be Jinny. But I will stretch my toes so that they touch the rail at the end of the bed; I will assure myself, touching the rail, of something hard. Now I cannot sink; cannot altogether fall through the thin sheet now. Now I spread my body on this frail mattress and hang suspended. I am above the earth now, I am no longer upright, to be knocked against and damaged. All is soft, and bending. Walls and cupboards whiten and bend their yellow squares on top of which a pale glass gleams. Out of me now my mind can pour. I can think of my Armadas sailing on the high waves. I am relieved of hard contacts and collisions. I sail on alone under white cliffs. Oh, but I sink, I fall! That is the corner of the cupboard; that is the nursery looking-glass. But they stretch, they elongate. I sink down on the black plumes of sleep; its thick wings are pressed to my eyes. Travelling through darkness I see the stretched flower-beds, and Mrs Constable runs from behind the corner of the pampas-grass to say my aunt has come to fetch me in a carriage. I mount; I escape; I rise on spring-heeled boots over the tree-tops. But I am now fallen into the carriage at the hall door, where she sits nodding yellow plumes with eyes hard like glazed marbles. Oh, to awake from dreaming! Look, there is the chest of drawers. Let me pull myself out of these waters. But they heap themselves on me; they sweep me between their great shoulders; I am turned; I am tumbled; I am stretched, among these long lights, these long waves, these endless paths, with people pursuing, pursuing.’

(ibid., pp.. 22-23)

(「洋服やシュミーズをたたむように」、ロウダは言う、「スーザンになりたいとか、ジニイになりたいとかの空しい望みを、捨ててしまおう。それよりも、ベッドの縁の樹木にとどくまで、爪先を伸ばしてみよう。樹木に触れて、固い何かがあることを確かめたいの。もう沈まないわ。薄いシートからころげ落ちはしないわ。もろいマットレスの上で、身体を思いきり伸ばし、宙に浮いてみよう。ほら、宙に浮いているのよ。突っ立っていないから、ぶっつけられて傷めつけられることもないの。何もかも柔らかで、しなっているわ。

壁や戸棚は白く霞み、黄色い四角ばった姿をしなわせ、その上に透明な鏡が光っている。身体の中から心が流れ出ていくわ。わたしの船隊が、高波をのりこえて走るところが、想像できてよ。激突や衝突からは免れているの。白い断崖の下を、わたしは一人航海する。ああ、でも沈んでしまうわ！落ちていくわ！あれは戸棚のかど、あれは子供部屋の姿見。二つながら、伸び、ひろがる。眠りの黒い羽毛の上に沈むと、その厚い翼が眼に押しあてられるわ。暗闇の中を歩いていくと、一面に花壇がひろがり、しろがねよしの茂る隅からミセス・コンスタブルが走り出てきて、伯母さまが馬車でわたしを連れにいらしたと告げるの。わたしは登る。逃げる。踵にばねのついた深靴をはいて、木のとっぺんからとっぺんへのりうつる。だけど、玄関口につけられた馬車の中に落ちてしまうの。馬車の中では伯母さまが、磨かれた大理石のような硬い眼をして、黄色い羽根飾りを波打たせながら坐っていらっしゃるのよ。ああ、夢から醒めたいわ！あら、あれは箆筒よ。水の中から這い上がらせて。どンドン水がおおいかぶさって、その大きな肩のあいだでわたしを洗い流すの。わたしはひっくり返され、ころがされ、引き伸ばされるの、この長い光、長い波、あとからあとから人々が続く、果てしない道のあいだで。」)

(ibid., pp.. 22-23)

太陽のひかりとは異なる非現実的な、なまめかしい、葡萄酒色のひかりの架空空間で集う仲間たち。しかしロウダは仲間たちから疎外された孤独感を感じる。自分は顔もなく何者でもない、アイデンティティーも失った非人格化された人物である。だから、逆に、落ち着いた、重厚な顔を探そうという、対極的で確としたものにすがろうとする。これは木のような硬いものに触れて、揺れ動く自己を支えようとするロウダの習性である。

'The purple light,' said Rhoda, 'in Miss Lambert's ring passes to and fro across the black stain on the white page of the Prayer Book. It is a vinous, it is an amorous light. Now that our boxes are unpacked in the dormitories, we sit herded together under maps of the entire world. There are desks with wells for the ink. We shall write our exercises in ink here. But here I am nobody. I have no face.

This great company, all dressed in brown serge, has robbed me of my identity. We are all callous, unfriended. I will seek out a face, a composed, a monumental face, and will endow it with omniscience, and wear it under my dress like a talisman and then (I promise this) I will find some dingle in a wood where I can display my assortment of curious treasures. I promise myself this. So I will not cry.'

(ibid., pp.. 27-28)

(「紫色の光が」、ロウダは言う、「ミス・ラムバートの指輪から輝き出て、祈祷書の白い頁の黒いしみの上をあちこち揺れ動くの。葡萄酒色の、なまめかしい光。私たちは寮で荷物を片づけてしまったので、こうやって一緒に、世界地図の下に坐っているの。机にインク皿がついているわ。ここでは練習問題をペんで書くのね。でもここで私は取るに足りない人。顔もないの。茶色いサージの服を着た大勢の仲間が、私の正体を奪ってしまったの。私たちはみんな冷淡で、友達もいない。私は顔を探すわ。落ち着いた、重々しい顔を。それに全知を与え、お守りのように肌身につけるわ。それから(約束するけど)森の中で何処か小さな谷間を見つけ、色々な珍しい宝物をそこでひろげるの。きっとそうするわ。だから泣かないわ。)」)

(ibid., pp.. 27-28)

ロウダ自身を表す典型的なイメージ。虚ろ、水、白い花びら。

Even Rhoda's face, mooning, vacant, is completed, like those white petals she used to swim in her bowl.

(ibid., pp. 34-35)

(ぼんやり眺めている虚ろなロウダの顔でさえ、鉢の中でいつも泳がせていた白い花びらのように、ととのっているわ。)

ロウダの性格を表現するイメージ。

Rhoda's vagueness:

(ibid., p. 35)

(曖昧模糊としたロウダ)

(ibid., p. 35)

入水して自殺するロウダ自身の最期を象徴しているかのようである。ひそかにパーシヴァルを愛していたロウダは彼の落馬によるインドでの死を聞いてグリニッジに行き、打ち寄せる波のなかにすみれを投げて彼の死を弔い、パーシヴァルが自分の身代わりとして逝ってくれたことを思いながらも、自分の生きることへの必然性と現実に立ち向かう気力を確認できず後に自ら入水自殺をする。

.....like Rhoda, crumpled among the ferns, staining my pink cotton green, while I dream of plants that flower under the sea, and rocks through which the fish swim slowly.

(ibid., p. 35)

(ロウダのように、海底で花咲く植物や、魚がゆっくり泳ぎ抜ける岩を夢みながら、ピンクの木綿のお洋服を緑色に染めて、羊歯のあいだにしわくちゃになってうずくまったりもしないわ。)

(ibid., p. 36)

ウルフの『ある作の日記』によると、子供の頃すでに「何てふしぎなんだろう—私は何者だろうかと考えて水たまりをとび越すことができなかったことがある、」という、同じフレーズがロウダによって繰り返される‘Consume me.’とロウダが叫んでいるのは私の命を奪ってと言っているのだろうか。ここでも「white」という言葉がまるでロウダの固有語のように繰り返される。

‘It is the first day of the summer holidays, said Rhoda. ‘And now, as the train passes by these red rocks, by this blue sea, the term, done with, forms itself into one shape behind me. I see its colour. June was white. I see the fields white with daisies, and white with dresses; and tennis courts marked with white. Then there was wind and violent thunder. There was a star riding through clouds one night, and I said to the star, ‘Consume me.’ That was at midsummer, after the garden party and my humiliation at the garden party. Wind and storm coloured July.

Also, in the middle, cadaverous, awful lay the grey puddle in the courtyard, when, holding an envelope in my hand, I carried a message, I came to the puddle. I could not cross it.

(ibid., p. 54)

(「今日から夏休みよ」、ロウダは言う。「この赤い岩のそばを、この青い海のを、汽車が通っていくと、過ぎ去った学期、私のうしろで、一つ形になるわ。その色が見えるの。六月は白い色。野原が雛菊で真っ白になり、

ドレスで真っ白になるの。テニスコートも白く描かれて。それから風が吹き、烈しい雷が鳴ったわ。或る晩、雪を縫って星が流れ、私は星に向かって祈ったの、『私を焼き尽くしてちょうだい』と。

あれは真夏のことだった。園遊会の終わったあと、園遊会で恥ずかしい思いをしたあとのことだったわ。七月を彩ったのは風と嵐。中庭の真中に、また青ざめた、恐ろしい、灰色の水溜りがあったわ。封筒を握りしめて伝言の手紙を届けにいくときよ。水溜りのところまで来たけれど、またげなかったの。)

(ibid., p. 56)

虎が突然襲ってくるという恐怖と幻覚は、あたかもウルフ自身が体現したかのような表現がロウダの口から叫ばれる。

身体が縛りつけられ、金縛りにあって膠着したような肉体という表現は典型的な精神消耗のときの言葉である。

‘So I detach the summer term. With intermittent shocks, sudden as the springs of a tiger, life emerges heaving its dark crest from the sea. It is to this we are attached; it is to this we are bound, as bodies to wild horses.

(ibid., p. 55)

(「こうやって私は、夏学期を切り離すの。断続的なショックを伴って、いきなり虎が跳びかかってくるように、人生は暗い波頭を海面からもたげて、姿を現わすのね。これに私たちは属しているのね。野生の馬に縛りつけられた身体のように、縛りつけられているのね。」)

(ibid., p. 56)

静けさがしのび寄る。子供にとっては楽しいはずの夏休みの初日のこの瞬間に怪物を連想するロウダ。

Silence closes over our transient passage. This I say is the present moment; this is the first day of the summer holidays. This is part of the merging monster to whom we are attached.’

(ibid., p. 55)

( 私たちがさっと通りぬけたあとに、静寂がすでにしのび寄り、これが現在の瞬間。これが夏休みの初日。たち現れる怪物の一部。それに私たちはくっついているのね。)

(ibid., p. 57)

消えさるという表現はロウダが自らの生命を絶つことを暗示しており、いつの間にか仲間の輪から離れているロウダを象徴するような言葉として繰り返される。

Rhoda disappearing down the avenue? Again, from some slight twitch I guess your feeling; I have escaped you; I have gone buzzing like a swarm of bees, endlessly vagrant, with none of your power of fixing remorselessly upon a single object. But I will return.’

(ibid., p. 73)

( 並木道の奥へと消えていくロウダだったろうか？ 他にも、微かな痙攣から君の気持ちをおしはかる。僕は君から離れていたんだね。蜂の群れのようにぶんぶん唸って、果てしもなくさすらい続けていたんだ、君のように一つのものに仮借なく集中する力もなしに、だけど僕は戻るよ。)

(ibid., p. 76)

すでにロウダは生の向こう側にある暗い池の水辺に入り、世間の人の無関心や残虐さから逃れて、一人夢想の世界にひたろうとするが、現実の世界につれ戻されて不釣り合いな、よるべなき肉体のまま

たたずむ。

‘I shall edge behind them,’ said Rhoda, ‘as if I saw someone I know. But I know no one. I shall twitch the curtain and look at the moon. Draughts of oblivion shall quench my agitation. The door opens. the tiger leaps. The door opens; terror rushes in; terror upon terror, pursuing me. Let me visit furtively the treasures I have laid apart. Pools lie on the other.....side of the world reflecting marble columns. The swallow dips her wing in dark pools. But what answer shall I give? I am thrust back to stand burning in this clumsy, this ill-fitting body, to receive the shafts of his indifference and his scorn, I who long for marble columns and pools on the other side of the world where the swallow dips her wings.

(ibid., p. 90)

（「みんなのうしろから、少しずつ進んでいくわ」、ロウダは言う、「誰か知っている人を見かけたふりをして。だけど、誰も知らないのよ。カーテンを開いて、お月さまを見ましょう。忘却の風に、動揺をしずめてもらうの。ドアが開く、虎が跳び込んでくる。ドアが開く。恐怖が駆け込んでくる。次々と恐怖が、追い駆けてくるの。とりのけておいた宝物をこっそり訪ねましょう。この世界の向こう側に、大理石の柱を映した池があるの。暗い池の中に、燕が羽を浸す。でもここでは、ドアが開いて、人々が入ってくる。あの方たちは私の方に来るわ。残虐さや無関心さを隠そうと、かすかな笑みを投げかけながら、私を捉える。燕が羽を浸す。お月さまは一人ぼっちで、青海原を進んでいくわ。私は、この方の手を取り、お返事しなければならないの。だけど、何てお返事しましょう？私は押し戻されて、この不恰好な、不似合な肉体を燃やしながらかみ、この方の無関心と軽蔑の矢を受けるのよ。燕が羽を浸す、世界の向こう側の、池や大理石の柱を、あこがれている私は。」

(ibid., p. 94-95)

成人したロウダはルイスと恋人関係になるが、彼との抱擁を恐れ二人は離別するが、ここにも性的なことに複雑な思いを抱くウルフの心情が覗える。しかしロウダは「ドア」が開き、「虎」がとびかかってくる恐怖が繰り返して表現されているが、これこそ現実のリアリティが、あたかも反復強迫のように襲ってくるのを象徴的に描いている。

水、白色、うつろ、孤独、疎外感、肉体と精神の分離からくる自己喪失ゆえに、煉瓦の壁や石などの固いものに触れていなければ自分が「ばらばら」になって下に落ちていく感覚に襲われ、生命に対する喪失感や人間としての存在感や人格が失われる。これは精神分析的には離人症という解釈がされ、暗く通り抜けられない「トンネル」、「永遠の回廊」という表現に象徴されている。

ロウダの場合はセプティマスが明らかに精神分裂症の病相を呈しているのとは異なり、ひとり夢想の世界に逃避して浮遊している離人症特有な無感覚な状態と推測できるのではないか。

ロウダはパーシヴァルの死後、「正方形」「長方形」の結合した形態を知覚的に捉えて、ひと時の生の実感であるビジョンを捉え、パーシヴァルが死の身代わりをしてくれたと思うが、それもつかの間であり現実というリアリティに屈し最期には死を選んでしまう。

ロウダという人物に作家ウルフの意識下の心の動きを投影して、その心の流れを小説という表現手段で描いた彼女の苦悩の挑戦と創作力が一つの作品として結実したといえる。

## 結論

精神的な病である躁鬱病に生涯悩まされ続けていたウルフは、自らが体現した壮絶な恐怖や苦悩を作品の中に描き、一見したところ支離滅裂と思われるイメージの飛翔や、この病に特有な言語である幻覚、死、自殺や強迫観念の共通したパターンが、一種のシーニュとしてウルフの作品の中に覗える。

しかし、この一見支離滅裂な脈絡のない意識の流れや言葉のイメージを単なる狂人の叫びの羅列のみに終わらず、小説として一つの芸術作品の域にまで高めたのは、ウルフの制御された構成力や形式、また卓越した表現力による賜物にほかならない。それはウルフの並々ならぬ教養と知識の深さ、社会や人間に対する深い洞察力や鋭い感性が彼女の作品の大いなる糧となっているのは事実だが、間歇的に襲う病魔はある意味で作家ウルフにとっては「両刃の剣」であったのかもしれない。ときには作家ウルフに天賦の才を与えたと同時に、自ら体現したこの一個人の私的な苦悩を作家の視点で客観視し、それを作品という普遍的な創造物に完成させるということは想像を絶する苦行であったにちがいないが、また自己救済でもあり、自己存在の証しであったかも知れない。ここにウルフの作家としての存在意義があったのではないか。

躁状態のときに爆発的なエネルギーと創作力を生みだし、また作品に対して推敲に推敲を重ねる執着性。鬱状態のときの恐怖や苦悩はや常人が垣間見ることが不可能な世界であり、自ら体験したことを、鋭い知覚と感性で捉え作品の中に、あらゆる表現の可能性を模索し、新しい小説形式を試作し達成したウルフの功績は讃えるべきものである。

1900年にフロイトが『夢判断』を書いて、脳を科学的な分析を始めた時代に、ウルフは心の動きを小説という形式で表現するための試作を自らを実験台にして達成したと言える。

ウルフの二作品に精神分析的な心の病相を象徴するシーニュの分析を試みたが、ウルフの等身大の登場人物たちに語らせ常人には解り得ない「見えざる世界の真実」がそこには存在するのは確かだ。

ウルフの小説を「意識の流れ」の作品として認識されるのが通例だが、それだけでは計りえない、むしろ我々のこころの中に波のように去来する捉えどころのないイメージや記憶や思いを、脈絡なく自由に飛翔する完成された一編の詩のような感を抱くのではなかろうか。またウルフの描いた、にび色に輝く海の光景を、静溢で色彩に満ちたりリカルな表現をした作家はどこにも見当たらない。

これこそがウルフの作品の尽くせない魅力の一つなのではないだろうか。

水面に儂く、虚ろに揺れるロウダ、社会から離脱させられるセプティマス、またウルフ自身も最後は作品の人物たちと同じく自殺というかたちで最期を迎えるのも、作家ウルフの想定した主人公たちの自然な運命の結末であったのかと納得してしまうところである。

## 「註」

註1. *Mrs. Dalloway* PP.27-28

Look the unseen bade him (見よ、と見えざるものが彼に命じた。)「内なる心の叫びが命じた。」

とある、この比喩的な文章に *unseen* の意味が一つのメタファとして抱えられる。

註 2. 神谷美恵子 「ヴァージニア・ウルフ研究」、みすず書房、1981

註 3. 精神科医の神谷氏は「ヴァージニア・ウルフ研究」(P.27)のなかでウルフは躁うつ病であると診断を下しているが、しかしウルフの人格と病相に精神分裂病的な要素があるのを見逃すことはできないと述べている。また神谷氏はウルフの病相から判断して、精神医学的には「非定型性精神病」と定義でき、ウルフは躁うつ病と精神分裂病の移行形と考えられるとも述べている。

註 4. Virginia Woolf, *A Writer's Diary*, The Hogarth Press, 1963, P.90

#### 「引用文献」

Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway*, Penguin Modern Classics, 1992

Virginia Woolf, *The Waves*, Penguin Modern Classics, 1968

ヴァージニア・ウルフ (近藤いね子訳) 「ダロウェイ夫人」、ヴァージニア・ウルフ、コレクション、みすず書房、1976年、

ヴァージニア・ウルフ (川本静子訳)、「波」、ヴァージニア・ウルフ、コレクション、みすず書房、1999年

#### 「参考文献」

Emily Blair, *Virginia Woolf*, State University of New York, Press, 2007

Julia Briggs, *Virginia Woolf, An Inner Life*. Harcourt, INC, 2005

Melba Cuddy-Keane, *Virginia Woolf, the Intellectual, and the Public Sphere*, Cambridge, 2003

Mitchell A. Leaska, *Virginia Woolf, A Passionate Apprentice*, Pimlico edition, 2004

Virginia Woolf, *A Writer's Diary*, Houghton Mifflin Harcourt, 1953

大沢 実、ヴァージニア・ウルフ研究、南雲堂、1956

大沢 実、ヴァージニア・ウルフ、研究社、1966

奥山礼子、ヴァージニア・ウルフ、彩流社、2011

神谷美恵子、ヴァージニア・ウルフ研究、みすず書房、1981

窪田憲子、ダロウェイ夫人、ミネルヴァ書房、2006

土井悠子、ヴァージニア・ウルフ、淡水社、2008

マイケル・ウィットワース (窪田憲子訳)、ヴァージニア・ウルフ、彩流社、2011

吉田 城、神経症者のいる文学、名古屋大学出版会、1996